フランス車はお好きですか？

渡島医師会
かみいそこどもクリニック
渋谷（しぶや）　好孝（よしたか）

フランス車はお好きですか？と聞かれると、多くの方は「よく壊れる」「どこで売っているかわからない」「近くに修理をしてくれるところがない」など、嫌われる要素満点で回答されると思います。さてその実際は……。

自分自身、小さいころから車が好きで、中学生のころには勉強もせずに自動車雑誌を読み漁るという生活をしておりました。そんな中、一つの記事が目に留まりました。フランス車（シトロエンのことでしたが）には独自の技術があふれていると。前輪駆動の先駆けとなるトラクシオン・アヴァン、窒素ガスと専用オイルを使用したハイドロニューマチック・サスペンションなどなど、車好き、メカ好きにとっては心踊る記事でした。

そうこうしているうちに大学に入り、クラブの先輩のドクターがシトロエンGSに乗っているということを聞きつけました。ハイドロ、細いタイヤ、FF、小さなエンジンでも力強く走る。こんな前知識でしたが、縁あって初めて乗せてもらったGSは俗にいう「魔法のじゅうたん」そのままに、ストロークの大きなサスペンションで、ゆったりと船に乗っているような感覚だったことを昨日のことのように覚えています。いつかはこの手に。

やがて大学を卒業し、結婚して子供ができると、いつ壊れるかわからない車に乗るわけにもいかず、排ガス規制を独自の技術で克服したホンダの車を乗り継いでおりました。

開業してからは、ドイツ車を数台乗り継ぎましたが、いつかはハイドロの気持ちも捨てきれず、ネットで憧れを探す日々でした。ある時、イギリスから輸入したシトロエンＣ６を販売する会社を見つけました。最近、テリー伊藤が世界一美しいセダンと称して購入し、話題となった車です。５年落ちで新車の半額、日本では販売されていないディーゼルエンジン、右ハンドル。気づいた時にはネットでポチッとしておりました。

数週間後、目の前に現れたシトロエンＣ６は光輝いておりました。30年越しのあこがれが目の前にあるのですから当然です。早速乗り込むと、ソフトな乗り心地は思い描いたものそのままに、ディーゼルとは思えない静かな車内がそこにありました。購入後、会議で札幌に行くにも、子どもに会いに旭川に行くのもJRからすべて車に代わりました。５年で10万キロ。その間、よく壊れることを実感し、５年間の修理費合計は定期点検費用も含めて購入額とほぼ同額でした。並行輸入車にもかかわらず、快く整備を行ってくれた札幌の正規販売店には感謝してもしきれません。壊れたのはハイドロを含むサスペンション関係だけで、電気系統やエンジン系統の故障はほとんどといっていいほどありませんでした。

この車との別れはあっけなく訪れました。オルタネーターの焼き付きでした。それほど費用はかからないと思いましたが、これまでの整備でさんざん費用がかかった車でしたので、経理担当の妻の首は最後まで縦には振ってくれませんでした。

シトロエンＣ６は楽しく、苦い思い出ばかりではなく、ヨーロピアンディーゼルのすばらしさを教えてくれました。

故障には慣れた、整備会社も見つけた、フランス車の愛好家にも触れ情報もたくさん得た私に怖いものはありません。次もフランス車のディーゼル車に乗ろうというのは当然の帰結でした。

購入当時の2010年代後半は、ドイツ車のディーゼル排ガス不正のさなかで、ディーゼルを乗ると思えばフランス車一択という状況でもあり、お世話になった販売店にあった旧プジョー508を次の旗艦に選びました。ディーゼルエンジンを載せるにあたり、他のガソリン車とは違うフロントサスペンション、容量の大きなディスクブレーキなど、メカ好きの私の心を揺さぶるものがあったのが決め手です。プジョーの車づくりの自慢はディーゼルエンジンと猫足と呼ばれるサスペンションだそうです。2018年から乗り始め、６年で10万キロ。リコール以外の故障はありませんでした。何の変哲もない普通のセダンですが、函館にはこれ一台しか走っていないので、Ｃ６同様変な車認定されているのか、周りの皆さんは近づいて走ろうとしてくれません。地元での整備会社も見つけ、整備費用は国産車並みのお手ごろになりました。

いま私の手元には２台のフランス車があります。20年落ちの206CC（マニュアル）と９年落ちのRCZというどちらもプジョー製の車です。EV化の波に呑み込まれる前に、ハイブリッドでもない素のガソリン車にもう一度乗りたかった。そんな気持ちが選択させました。

フランス車がお好きですかと聞かれたら、私はYesですが、ほかの人に勧めようとは露程も思いません。でもチャンスがあれば、ぜひ触れてみてほしいと思います。国産やドイツ車にはない、故障したらどうしようという不安感を抱えながら走るものまた一興かと。